The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接尾語コシの成立過程
Author(s)	舘谷, 笑子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1999, 33, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

接尾語コシの成立過程

舘谷笑子

はじめに

「―コシ（コイ）」という形をとるク活用形容詞は中古から現代に至るまで存する。これらをコシ型形容詞と呼ぶことにする。このコシ型形容詞の語末コイについて、『日本国語大辞典』では、

①形容詞「濃い」が接尾語化したもの。名詞などに付き、その間に促音のはいることが多い。濃いさまの意をあらわす。「あぶらっこい」など。②体言または性質、状態をあらわす語に付いて、形容詞をつくる。上が促音になることも多い。性質、状態をやや強調していう。「ちょろこい」「まるっこい」「細っこい」「しつっこい」「やにこい」など。〔補注〕②には、もともと、ク活用形容詞の語幹と語尾との間に「こ」が挿入されたものと、①の「こい」がその意味を失ってきたものとがあると思われる。

とされる。コが挿入されたものという捉え方はこれ以外に見ず、このように捉えないほうがよいと考える。一方、形容詞コシに由来するという捉え方は近世から既に見られる。

〔コイ〕詞ノ尾ニ添ハリテ、甚シキ意ヲ含メリ、濃ノ字ノ意ニヤアラン（常陸方言）

形容詞コシは平安時代初期から、

・浅緑濃い縹〈己以波奈太〉染めかけたりとも見るまでに玉光る下光る新京朱雀のしだり柳…（催馬楽　浅緑）

・穀稼諸の果實の滋（古）キ味ひ皆損減すると（西大寺本金光明最勝王経　平安初期点）

・果實も並に滋（古）ク繁クして（西大寺本金光明最勝王経　平安初期点）

のように、色・味・密度が濃いことを表す用例が見られ、以後主に濃色表現で多く用いられるが上代には確例が見られない。[1] コシ型形容詞も上代には見られず、中古に見られるコシ型形容詞の意味が後で述べるように濃度と結びつくことから、この語末コシ（コイ）は形容詞コシが基となっていると考えられよう。

しかし、『日本国語大辞典』の指摘にあるように、時代が下ると語末のコシ（コイ）は上接部の意味を強調する働きを持つようになるが、この変化の過程については詳しい考察がなされていない。コシ型形容詞と同様のものにタシ型形容詞があり、タシ型形容詞の語末タシ（タイ）は形容詞イタシに由来するものだが、上接部に独立的要素だけでなく非独立的要素をとるようになり、中世に接尾語化することについて述べたことがある。[2] コシ型形容詞についても同様の変化が想定され、本稿ではタシ型形容詞の場合と同様にコシ型形容詞の上接部の語構成要素が独立的か非独立的かに注目し、接尾語コシ（コイ）の成立について考察していきたい。

一　「独立的要素＋形容詞コシ（コイ）」

先ず、コシ型形容詞の中でも「独立的要素（名詞・動詞連用形）＋形容詞コシ（コイ）」の形をとるものを挙げ

て考察する。

【名詞】

アセコシ　うとまねどたれも汗こき夏なればま遠に寝とや心隔つる（曽丹集）

アブラコシ　膩（女利反）（アブラコシ　ナメル）（観智院本類聚名義抄　佛中58ウ）

ヤニコイ　住吉のきしませふりにねばふしてやにこき人はまつに気のとく（吾吟我集　六）

ミソコイ　小間ものと地紙みそこい咄をし（柳多留　二編）

これら上接部に名詞をとるものは平安時代から見られ、いずれもその名詞が液体状の、ないし可塑的な物を表し、それが多くある様を表している。これはコザケ（醴酒）・コミヅ（漿）[3]といった形容詞語幹の用法と共通しており、形容詞コシの意味が含まれていると考えられる。つまり「名詞＋形容詞コシ（コイ）」の形をとる複合形容詞だと言えよう。

【動詞連用形】

ネゴイ　寝濃（コイ）（運歩色葉集　二17オ）

ネバリッコイ　君はそれ程強くはないが粘りっこいので誰よりも手剛い感じだと（途上〈嘉村礒多〉）

上接部に動詞連用形をとるのは名詞の場合よりも時代が下った中世からである。ネゴイは動詞ヌ（寝）の連用形ネに形容詞コイがついたと思われるが、名詞の場合と比べると形容詞コイの意味とは結びつきにくい。

Negoi. l. negoi fito. ネゴイ、または、ネゴイヒト（寝濃い、または、寝濃い人）よく眠る（人）（日葡辞書）

とあることから、語末コイは形容詞コイの意味が薄れて単に上接部の意味の程度を強調していると考えられる。

このように、コシ型形容詞は中古から「独立的要素＋形容詞コシ（コイ）」の形をとる複合形容詞として形成されたことが分かる。タシ型形容詞と比較すると、上接部が動詞連用形のものの数が少ないが、その要因としては基の形容詞イタシが副詞的にも用いられるのに対して、形容詞コシは情態形容詞であり、副詞的にはあまり用いられないことが関係していると思われる。

二　「非独立的要素＋接尾語（ッ）コシ（コイ）」

次に、「非独立的要素（動詞語幹・形容詞語幹等）＋接尾語（ッ）コシ（コイ）」の形をとるコシ型形容詞を挙げる。

【動詞語幹】

シナッコイ　十四の秋よりここにつとめて、ぼつとりとしてしなつこく（色道大鑑　二・二）

スベッコイ　すべつこいかほに官金入れあげる（柳樽拾遺）

ナツコイ　なつこひ　懐く也。江　なれる（浜荻　仙台）

【形容詞語幹】

サムッコイ　田をかへすがへすもういわざだ　春風もまださむつこき里（やつこはいかい）

スッコイ　どう腹や俄にふつとくだすらん　呑にすつこき此濁酒（やつこはいかい）

ヒヤコイ　俄に水滴あがりきよげに冷こく夏をしのぐためには是ぞと。（本朝桜陰比事　三・三）

ヌルッコイ　爰にはをとこだてのぬるつこく、にやい申さねども（やつこはいかい）

チョロッコイ　ちょろッこい様でももげぬ禿の手（柳多留　四編）

ノロッコイ　のろッこい四つ手後からぜげん付き　卜文（柳多留　十七編）

トロッコイ　〔権〕…義理だの。なんのと。そんなとろつこいこつちやァ馬鹿らしい。（契情実之巻　後編三）

マルコイ　ヲゝしん気丸こう成つた角たづね（机の塵）

ウマッコイ　ナントうまツこいパンリング〔口あひ〕だらう（当世書生気質　一〇）

ホソッコイ　HOSOKKOI, -KU ホソッコイ adj. (coll.) Same as hosoi.（和英語林集成　三版）

ネバッコイ　一段声を低めて、のろくと粘つこく言つて落着き払つた容態。（暴風〈国木田独歩〉二の二）

ネツコイ　そのねつこい、腸の底まで食ひ込まなければ承知できないやうな恋愛では（桐畑〈里見弴〉好敵手・八）

セマッコイ　狭つこい boudoir のやうな船室で（或る女〈有島武郎〉二〇）

マダルコイ　「何も麥酒なんぞぢや間怠（まだる）こくツて」と極り悪さうに俯目になる。（其面影〈二葉亭四迷〉七十五）

これら動詞語幹・形容詞語幹を上接部にとるコシ型形容詞は近世以降多く見られる。特に多い形容詞語幹のものは「形容詞語幹＋コ＋シ」とコが挿入されたかのようにも見えるため、先に示した『日本国語大辞典』の一説が存するのだろうが、コシ型形容詞の上接部全体から見ると他の語構成要素もとることから、この説には従えない。また、ここで挙げた例はいずれも第一節で見た名詞の場合とは異なり、形容詞コシの意味が残されておらず、語末の（ッ）コシ（コイ）は接尾語化したものと見られる。

更に注目すべき点は、ナツコイ・スッコイ・マダルコイを除くといずれの上接部も重複素となり得ることである。このことがいかなる意味を持つかについては結論を見出せてはいないが、これらのコシ型形容詞が情態性の語であ

ることと、上接部が重複して情態を表す語となることとは無関係ではないだろう。(4)

次に、以上の分類にあてはまらない上接部を有する語を挙げる。

【その他】

シツコシ　許渾はしつこく詩を作たる者なるほどに許湿と云たぞ（湖鏡集）

ウザッコイ　うざッこい親類の来る美しさ　水仙連（柳多留　十九編）

シツコシの上接部シツは、『角川古語大辞典』によると漢語名詞「湿」に由来するとされる。しかし、漢語名詞シツは単独ではあまり用いられず、またコシ型形容詞で漢語名詞を上接部にとるものは他に見られない。従って、本稿では独立的要素には含めないこととするが、では上接部シツをどのように捉えるべきか、非独立的要素に含めてよいかについては問題が残る。

ウザッコイはウザウザという重複形の重複素が上接部にあたり、先に挙げたスベッコイなどと類似のものである。

ヒスラコシ　次　ヒスラコシ如何　ハリセル　ラカ　カト　セリノ反　張行ノ心歟（名語記　十34オ）

シブラコイ　どこじややらうるめ焼香のしぶらこい（すがたなぞ）

シツラッコイ　〔禿〕アレしつらつこい背中に鼠が居るハな（和唐珍解）

フテラコイ　禿どもふてらつこいとおして行く（柳多留　九編）

これらは「―ラ（ッ）コシ（コイ）」の形をとる。このラは情態言を作る接尾辞ラと思われ、ヒスラコシはヒスイ・ヒスラシのヒスに、シブラコイはシブシ・シブシブ（ト）のシブに、シツラッコイはシツコシのシツに、フテラコイはフテルのフテに、それぞれ情態言を作る接尾辞ラ(5)が付き、更に（ッ）コシ（コイ）が付いた「〔上接部＋

ラ〕＋接尾語（ッ）コシ（コイ）」という形のコシ型形容詞と考えられる。

ヌルマッコイ　ぬるまッこいラムネを渇いた喉へ通した。（黒猫〈龍胆寺雄〉四）

この語は、タシ型形容詞ヌルマッタイと同様、ヌルマユのヌルマと関連すると思われる。

以上のように、上接部に非独立的要素とるコシ型形容詞はヒスラコシが中世から見られ、近世以降多く見られるようになる。従って、接尾語コシの成立は接尾語タシと同様に中世だと考えられる。

マルマコイ　いかな〳〵むかしにかはり丸まこき金子くれるなしやう〳〵四角にくたきたるもの。（色里三所世帯　上・五）

マルマコイは、マルマッチイがマルマルッチイの約まったものと考えられるのと同様に、マルマル（ッ）コイが約まったものと思われる。[6] しかし、マルマル（ッ）コイの用例が確認できていないので問題は残る。

以上、第一・二節で見た語が本来のコシ型形容詞と考えられるものである。次に挙げる語も形態上はコシ型形容詞と考えられるが、本来は別の形であったものが音の変化によって「―コイ」の形をとるようになったものであり、コシ型形容詞に準じて捉えられる。

ハシコイ　するがづゝみに手ばしこく金五十両すみぐろに、似せもにせたり五十はい、（冥土の飛脚）

ヤワラコイ　たばこ〳〵と待つ宵の。松葉たばこのやはらこき。（嫗山姥　二）

ヤラコイ　鰻なども御当地の和いばかりでもみないがナ。（浮世風呂　二編上）

ヤッコイ　ヲねへナ。おいの河原といふ所の烟草でゑす（中略）ヲナニハやつこひ事いし（真女意題）

これらにはいずれも対応するカイ型形容詞ハシカイ・ヤワラカイ・ヤラカイが存し、[7] それらのカの母音が交替してハシコイ・ヤワラコイ・ヤラコイに、ヤラコイが促音便化してヤッコイになったものと思われる。[8]

アマチコイ　詞　コレ仰しやるな常盤様。あまちこい減ず口聞いて居る主でないぞえ。（鬼一法眼三略巻　四）

この語は、アマッチョロコイの約まったものとも捉えられるが、そのような音の変化が起こり得るのかについては今後調査する必要がある。

ニッコイ　相　「残念。腹が立ちますヨ。憎こい孝助だ。只置きましねへ。（怪談牡丹燈籠　九）

この語はこの一例しか見られず、ニクイの促音便化したニックイのクが母音交替したものと考えられる。

このように、近世以降は上接部が非独立的要素のもの、特に形容詞語幹をとるコシ型形容詞が多く、接尾語コシが成立し勢力を拡大したことが分かる。その勢力の拡大とともに、接尾語コイが付いたのではなく音の変化などによって語末がコイとなった語も多く現れたと見られる。

三　まとめ

これまで上接部の語構成要素に注目してコシ型形容詞を見てきた。その推移を次の表に示した。

この表から、「独立的要素＋形容詞コシ（コイ）」という複合形容詞のものは中古から見られるが、「非独立的要素＋接尾語（ッ）コシ（コイ）」という派生形容詞のものが中世から見られはじめ、近世に勢力を拡大することが確認できる。この推移は、コシ型形容詞の上接部が独立的要素から非独立的要素へと変化し、複合形容詞から派生形容詞へと変化していると言えよう。つまり、語末のコシ（コイ）は形容詞コシが中世から接尾語化したと言え、接尾語タシと類似の成立過程にあることが窺える。

この接尾語コシの意味の面に注目すると、接尾語タシと同様、上接部の意味の程度を強調するものと思われるが、

【表】

		古中	中世	近世	近代
独立的要素	名詞	アセコシ アブラコシ		ヤニコイ ミソコイ	
	動詞連用形		ネゴシ		ネバリッコイ
非独立的要素	動詞語幹			シナッコイ スベッコイ	ナツコイ
	形容詞語幹			サムッコイ スッコイ ヒヤコイ ヌルッコイ チョロッコイ ノロッコイ トロッコイ マルコイ	ウマッコイ ホソッコイ ネバッコイ ネツコイ セマッコイ マダルコイ
	その他		ヒスラコシ シツコラ	シブラコイ シツラッコイ フテラコイ マルマコイ ウザッコイ	ヌルマッコイ

接尾語コシの場合はその上接部の意味が情態に集中すると思われる。前節で挙げた用例からもそのことは窺えよう。『現代形容詞用法辞典』(9)ではホソッコイ・チッコイ等はホソイ・チイサイ等よりも意味が狭く、物理的意味でのみ用いられることが指摘されている。このことからも、接尾語コシは、元来上接部の情態的意味の程度を強調する働きを有すると考えられる。すると、コシ型形容詞の上接部に「―＋ラ」のものが見られることも、ラが先に指摘したように情態言を形成する接尾辞であることから説明ができよう。

また、この表で傍線を付した語は、その上接部が重複素となり得ることを示しており、接尾語化した後のコシ型形容詞の上接部に重複素の多いことが分かる。先に述べた情態言を形成する接尾辞ラが付いた「―ラ」(【表】で網かけを付している)と重複形とには関わりがあることが村上昭子氏によって指摘されている。

非反復形＝ラが反復形に相当するものであるとすると、非反復形は反復形とおなじはたらきをしているはずである。反復形については、情態言の形成にかかわっているとの指摘が阪倉篤義氏によってなされている。すると、非反復形＝ラも、反復形と同様に、情態言を形成するものであると考えられる。そして、情態言を形成するはたらきは、ラにあるとみられる。[10]

これによると、重複形と「―ラ」とはいずれも情態言を形成するという同じ働きを有しており、従ってコシ型形容詞の上接部に重複素と「―ラ」との両方が見られることはこの指摘と矛盾する現象のように思われる。しかし、全ての重複素に接尾語コシが付くわけではなく、重複素の中でも情態を表す語基が接尾語コシの上接部になり得ると考えてよいだろう。

このような性格は、基の形容詞コシの意味と関わると思われる。形容詞コシは先に述べたように情態形容詞であり、従って接尾語コシも主に情態的意味の程度を強調し、物事のある情態・性質を捉えてその情態・性質の甚だしいことを表すと考えられよう。接尾語タシについても同様で、基の形容詞イタシが感覚形容詞であり、従って接尾語タシは主に感覚的意味の程度を強調し、対象に抱くある感覚を捉えその感覚の甚だしいことを表すと考えられるのである。

このように、コシ型形容詞とタシ型形容詞とは語末のコシ（コイ）・タシ（タイ）が基は形容詞であったものが中世に接尾語化するという共通性があり、その意味においても基の形容詞の影響を接尾語が受けているという共通点が見られた。これは他の基は単独で用いられる形容詞が接尾語化するもの〔ナシ（甚）型形容詞・トシ型形容詞〕についても同様のことが言える。つまり、形容詞化接尾語は、

A、独立した形容詞としての働きを持つもの

(a)上接部に独立的要素をとって複合形容詞をつくるもの
(b)上接部に非独立的要素をとって派生形容詞をつくるもの

B、接尾語としての働きしか持たないもの

のように分類でき、A(a)からA(b)へ変化する形容詞化接尾語の共通性と言える。

おわりに

以上のように見てきた結果、コシ型形容詞は中古には単独で用いられる形容詞コシが上接部に独立的要素をとる複合形容詞であったのが、中世以降に語末のコシ（コイ）が接尾語化して上接部に非独立的要素をとる派生形容詞を形成するようになったことが分かった。また、その意味については、主に接尾語コシの上接部は情態を表す要素であり、接尾語コシが上接部の表す情態的な意味を強調していることも指摘した。

このように、前稿で扱ったタシ型形容詞、本稿で扱ったコシ型形容詞は共に複合形容詞から派生形容詞へ変化し、共通の過程を経て接尾語タシ・コシが成立したと考えられる。また、接尾語タシ・コシはその意味において、基の形容詞イタシ・コシの影響を受けている点でも共通性が見られるのである。

注

（1）拙稿「『紅之深染・薄染』――色の濃淡を表す形容詞の考察から――」（萬葉160　平9・3）
（2）拙稿「接尾語タシの成立過程――タシ型形容詞の考察から――」（語文〔大阪大学〕69　平9・11）

（3）　コザケ　醵　古佐介（新撰字鏡）
　　コミヅ　漿　古美豆（新訳華厳経音義私記）

（4）　他にもニヤコイ・イシコイ・スジコイ・ムジコイ・チッコイ等が見られるが、これらには問題が存する。

　ニヤコイ　まだそれ計か下地がにやこい旦那さま（夕霧阿波鳴渡　中）

　ニヤコイは動詞ニヤケルの語幹にコシが付いたと考えられそうだが、菊田紀郎氏は『講座日本語の語彙　語誌Ⅲ』「にやける」の項（明治書院　昭58・6）で名詞ニヤケ（若気）を形容詞化した語で、基は「女などに対して情にもろい」義であったのが「にやけている」意に派生したとされる。

　イシコイ　吁無遜吁不好吁無礼皆一郭之艶語（瓢金窟）

　スジコイ　つめなが仲居、かぎ女郎、すぢこい芸子にいたるまで（枕童児抜差万遍玉茎　九）

　この二語はどの様に解釈すべきなのか問題の残る語であるが、特殊な位相で用いられたと思われる。

　チッコイ　あんな小ツこいもんが色事も存じまへんでうし（石川五右衛門の生立〈上司小剣〉十三）

　チッコイはチイサイが音の変化を起こし、「チッ―」という形をとるようになり、それにコシがついたと推察できよう。類似のチッチャイについては、吉見孝夫氏「『小チャイ』考」（筑波大学日本語と日本文学2　昭57・11）によってチイサイとの関わりが指摘されている。

　ムジコイ　○かはいらしいと云詞のかはりに、（略）武劦片田舎にて○むぢこいと云也。（物類称呼　五）

　ムジコイは方言として用いられたと思われる。他にも方言にコシ型形容詞は多く見られ、『日本国語大辞典』の見出し語となっているものを参考に挙げておく。

　アジコイ・アチコイ・アマコイ・イナラッコイ・インコイ・エセコイ・オオッコイ・オコンコイ・オゾコイ・オボコイ・カルコイ・キッチャコイ・コタッコイ・サドコイ・シコイ・シタラコイ・シビラコイ・シメリッコイ・シラバシッコイ・シロバシッコイ・スネコイ・スボッコイ・ズレッコイ・セシコイ・タッピラコイ・チチャコイ・チビコイ・チマコイ・チャッコイ・テシコイ・ドスコイ・ドベラコイ・トロコイ・ナメコイ・ナメラコイ・ヌコイ・ヌメッコイ・ヌルコイ・ヌルタコイ・ネシコイ・ネッコイ・ノコイ・ノベコイ・ノメッコイ・ババコイ・ビタラコイ・ビドロッコイ・ベタコイ・ベチャコイ・ペチャラコイ・ベッコイ・ヘッタラコイ・ベチャラコイ・ヘラコイ・

ヤコイ・ヤスコイ・ヤワコイ・ユルコイ・マチコイ

これら方言においても上接部に形容詞語幹や「―ラ」をとるものが多く見られる。

(5) 阪倉篤義氏『語構成の研究』(角川書店　昭41・3)、村上昭子氏「接尾辞ラシイの成立」(国語学124　昭56・3)等。

(6) 蜂矢真郷氏「造語の変遷と古語・廃語」(日本語学11―5　平4・11)

(7) ハシカイ　武士の嗜む懐中松明手ばしかく燈し立。(菅原伝授手習鑑)

ヤワラカイ　ツヨウヤワラコウイウ　へいけみころしみ(詞葉新雅)

ヤラカイ　やらかうなるやうに茶を入れて(新板一口はなし　十七)

これらカイ型形容詞については、蜂矢真郷氏「ケシ・カシイ・カイ」(『同志社国語学論集』和泉書院　昭58・5)を参照。

(8) また逆に、コシ型形容詞からカイ型形容詞に変化したと思われるものもある。

テコイ　Tecoi. テコイ　多量な(こと)、または、大きな(こと)。¶tecô yamasuru.(てこうやまする)ひどく人を殴る。(日葡辞書)

デコイ　Decoi. デコイ　大きな(もの)、または、大量の(もの)。上(*Cami*)では Tecoi と言う。¶Decô yamasuru.(でかうやまする)ひどく人を殴打する。卑語。(日葡辞書)

テコイはデコイと類義で、量的に甚だしいことを表す。テコラサ・テコラケシのテコもこのテコイの語幹と捉えることは『小学館古語大辞典』「てこらさ」の語誌(山口佳紀氏)で述べられている。このテコイ・デコイから音の変化と他の要因によってデカイが成立したのではないかと思われる。

(9) 飛田良文氏・浅田秀子氏(東京堂出版　平3・7)

(10) 「接尾辞ラシイの成立」(前掲)

(大学院後期課程学生)